SUZUKA UNIVERSITY LIBRARY NEWS

2024 年度
2 月号

2024 年の立春は 2 月 4 日です。2 月のはじめといえば、まだまだ寒さも厳しく、とても春の訪れなんか感じない、という方も多いと思いますが、立春は暦の上での「春の始まり」と言われています。寒い時期ではありますが、「立春」を越えれば春はもうすぐそこまで来ています。虫や草木も春にむけて動き始めています。皆さんも春に向けて始めたいことがあれば、しっかり準備していきましょう。

今月の展示コーナー

今月の展示コーナーのテーマは、鈴鹿大学短期大学部こども学専攻より『ヨシタケシンスケ　特集』です。絶妙な表情を見せるイラストと考えさせられるストーリーでファンの方も多いのではないでしょうか。

ヨシタケシンスケ
日常のさりげないひとコマを独特の角度で切り取ったスケッチ集や、児童書の挿絵、装画、イラストエッセイなど、幅広く活躍。MOE 絵本屋さん大賞やニューヨーク・タイムズ最優秀絵本賞など、受賞多数。

図書館からのお知らせ

図書館のラーニングコモンズの隣にある棚には、雑誌が配架されています。学部別になっており、専門的なものから、普段の生活に役立つ内容のものまで幅広く選書しています。逐次刊行されるので、常に新しい情報が手に入りやすいのも魅力の 1 つです。空き時間などにお気軽にご活用ください。雑誌の貸出期間は 1 週間です。(学外者の方は貸出しができません。館内でご覧ください。)

【配架雑誌一覧】(一部抜粋)

・Simple	・東海ウォーカー	・東洋経済
・きょうの料理	・学校給食	・健康教室
・ほいくあっぷ	・Ｐｉａｎｏ	・保育の友
・留学ジャーナル	・ニューズウィーク日本版	

新着本

北海道日本ハムファイターズの食事術/日本ハム株式会社（監修）

日本ハムファイターズは、プロ野球で初めてスポーツ栄養の大切さに着目した球団です。強いカラダを作る食事のコツとレシピを紹介。キャンプ中の食事風景や寮のごはん、家族で食べる時の選手と家族の量の比較など、北海道日本ハムファイターズの食事がまるっとわかる 1 冊です。

新食育入門　食育を正しく伝える人になる。/服部幸應（監修）

「食育基本法」の生みの親、服部幸應が伝える食育の基本。彼の提唱する食育の基本となる食育三本柱、「選食力」「共食力」「地球の食を考える」をわかりやすく解説。本書はこれから食育活動に参加する人、すでに活動している人にとっても新たな道しるべになる食育入門書です。

なぜ男女の賃金に格差があるのか 女性の生き方の経済学/クラウディア・ゴールディン

ジェンダー平等が浸透しつつある現在でも残る男女格差。その構造を歴史と詳細なデータから解き明かす。ウーマンリブ「静かな革命」リリー・レッドベター公平賃金法など、20 世紀以降を振り返りながら、データを経済分析し、女性の賃金の上昇を阻む原因を抉り出す。世界の先進国の男女の「働き方」を見直すきっかけとなる一冊。

TwinBooks **完成シリーズ** 1 **「教職教養の要点理解** 2025 **年度版」/時事通信出版局**

新学習指導要領にも完全対応。教職教養で出題される基本事項をコンパクトに解説。基礎から学び，理解できるように構成されている。全自治体の過去 5 年間の出題傾向をまとめた特別資料の「出題頻度シート」付きで，情報面のサポートも充実の 1 冊。

バスが来ましたよ/由美村嬉々

全盲になった男性が地元の小学生に助けられながら続けたバス通勤の実話を元にした絵本。「バスが来ましたよ」その声はやがて、次々と受け継がれ…。小さなひとこと、小さな手。でも、それは多くの人の心を動かした。小さな親切の物語。

寿限無　（声にだすことばえほん）/齋藤　孝(著), 工藤　ノリコ(絵)

あるところに、それはそれは長い名前の男の子がおりました。その子の名前は、寿限無 寿限無、五劫のすりきれ、海砂利水魚の、水行末、雲来末、風来末、食う寝るところに住むところ、……。ページをめくって寿限無を唱える、声に出すことば絵本。

先生のおすすめ図書

「よだかの星」
　宮沢　賢治

短期大学部准教授　みやざき　美栄

SDGs の 16 番目のゴールは「平和と公正をすべての人に」です。2030 年がゴールの年ですが、戦争や紛争の影響を受けて暮らす国や地域は後を絶たず、日本国内においても生活困窮やいじめなど様々な理由で自ら命を絶ってしまう人が依然として 2 万人を超えています。

あなたは、今悩んでいることや困っていることはありませんか。周囲で、悩んでいる人や困っている人はいませんか。そして、本当に困ったとき、安心できる場所はありますか。なにより、幸せですか。

さて、今回、ご紹介させていただく本は、童話作家である宮沢賢治の『よだかの星』です。『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』などと並んでこの作品をご存知の方は多いのではないでしょうか。私は、この物語と子どもの頃に出会いましたが、ひょんなきっかけで、ここ数年、毎年読み直しています。多くの物語がそうであるように、読む時々で受け捉え方や読み終えた感覚が少しずつ違います。「よだか」を主人公として多くの生き物が登場しますが、まるで今の人間が生きる世の中をそっくりそのまま描いているようです。しかし、きっと宮沢賢治が生きた時代、人生にも同じ苦悩があって、文学で訴えたのでしょう。私は、この物語に登場する「よだか」にも「かわせみ」にも「たいよう」にも、他に登場する生き物すべての存在になりたくありません。そして、間違っても「たか」にならないように。もし、あなたの周りに「たか」のような人がいたとしたら、あなたはどのような行動ができますか。

短い物語です。読んだことがない人は、是非一度読んでください。そして、昔読んだことがある人も、もう一度、読み直してみてください。

すべての人の平和と公正を願って。

「音楽における永遠をめざして　―音楽のパトグラフィー２―」
　大谷　正人

こども教育学部助教　　大久保　友加里

本書は、精神科医・大学教員として長年活躍されている一方で、地域に根付いたオーケストラで音楽監督兼常任指揮者を務められている著者ならではの視点から、クラシック音楽家や作品を取り上げ、特に音楽における永遠性・超越性について論じられた素晴らしい音楽書です。

聴覚障害という苦難と向き合いながら、自己の存在を超えて晩年に至るまで数々の傑作を作曲したベートーヴェン・スメタナ・フォーレ、指揮・作曲の両面において 20 世紀後半の音楽界で世界的な活躍を遂げたバーンスタイン、200 年以上の間にわたって人々に愛され続けているモーツァルトをはじめ、大作曲家といわれている音楽家の生涯や作風の変遷が、多数の譜例を用いて、心理学的視点もふまえながら、とても詳細かつ丁寧に分析されることによって、わかりやすく解説されていますが、なかでも著者自身が最も得意とされるマーラーに関する２つの章の内容が圧巻です。クラシック音楽史上、交響曲としての歴史の中でも非常に重要な交響曲第８番、第９番というマーラー晩年の２作品の楽曲分析をとおして、マーラー自身がテーマとしていたことの一つである「死の受容」から、永遠につながる超越性、演奏することによって得られる至高性についても述べられています。

クラシック音楽について詳しく知らなくても、本書をとおして偉大な音楽家についての理解を深めたり、遺された芸術作品に触れることは、私たちが生きていくうえで大きな力を得ることができる、とても貴重で素晴らしい経験になると考えますので、ぜひ読んでみてください。